福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

アクティブ・ラーニングの取り組み―「言語表現」における主体的学習の構成と実際―

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-11-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松友, 一雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8012

特別寄稿

アクティブ・ラーニングの取り組み
―「言語表現」における主体的学習の構成と実際 ―

教育地域科学部　言語教育講座　松友　一雄

1.本講義の目的と構成

「言語表現」の授業は、大学におけるジェネリック・スキル（例えば、講義や演習におけるレポートや発表といった表現活動、グループによる課題解決や創造的活動）を身につけ、これからの大学生活に生かしていくことを目的としている。それ故に、「方法知」の学習を経て、実際に受講する学生が表現活動やグループワークを行う必要がある。

実際には以下の様な講義スケジュールを組んでいる。

第一講　ガイダンス
第二講　情報収集と情報操作
　　― 情報豊かな生活の構築 ―
第三講　自覚的な言語運用と論理的表現方法
第四講　簡潔な文章表現とわかりやすさ
　　― 要約力と理解力の関係から ―
第五講　図解力と概念図の作成
第六講　グループワークの基礎
　　グループ作りとエンカウンター
第七講　アイデアをたくさん出すための方法
　　ブレーンストーミング
第八講　多角的に物を考える方法
　　ダイアモンドランキング
第九講　社会の動向を推論する
　　世論調査の結果を予測する
第十講　グループで企画を作る
　　枠組みを使って企画書を書く
第十一講～第十四講
　　企画書からプレゼンテーション作成
第十五講～第十六講
　　発表会と評価

2.言語表現の理論的基礎と方法を学ぶ

第一講～第五講までは、理論的な学習を講義と演習の形で行っている。当初、学生たちは「言語表現」という授業の名前から、文章の書き方を学ぶものだという先入観で受講している者も少なくはないが、第二講「何を書くか」に関わる情報収集や情報操作の方法を受講すると、自分の文章表現力の根幹が自分の保有する情報量と自覚的な情報操作によるものであることを理解することになる。

「よくわからないこと」や「よく知らないこと」をあえて課題にして文章を書かせてみるが、「自分がよくわからないこと」や「よく知らないこと」ひいては「自分の専門ではないこと」は「書けないこと」ひいては「話せないこと」なのだという判断を必要とすることを合わせて学ばせる。

第四講や第五講では、簡潔な表現を生み出すための要約や図解の方法を具体的に学び、話し合いや説明、報告などのプレゼンテーションにおいては、言語表現における「わかりやすさ」の必要性を実感する。

3.グループワークを通した集団思考のトレーニング

第六講～第十講までは、グループに分かれてグループワークを行いながら、集団思考の方法と経験を積んでいく。

これ以降は、出席の報告から課題の提出まですべてグループ単位で行わせる。毎回の課題に対するレポートも協働で作成し、報告書の形で提出するか、プレゼンの形で次回の最初に全体に報告して評価を受ける。

この授業の細かな課題の評価は基本的にグループ単位で、評価する主体は私だけではなく学生による評価も取り入れている。それゆえ、プレゼンなどにしても受講者全体の何人が賛同してくれるかという点を意識したものになる。

第六講では、グループとしての出発点であるから、リーダー、スケジューラー、エンタティナーなど主要な役割を分担し、「新しく祝日を作るとすると、いつどのような祝日を作るか」というショート課題に取り組ませながら、班の中での顔合わせをする。簡単な課題に協働で取り組む中で自己紹介以上の関係性を構築できることを学ばせる。

その際に評価は受講者全体から次回に受けることを提示し、評価もグループ単位で行っていく事を示す。こうして次回を迎えると、だいたい受講者全体の評価は厳しく、よく聞いていない人や興味のない人をどうすれば引きつけることが可能なのかということを学ぶ必然性を実感する受講者が多い。それは、評価を通した圧力では

という懸念もあるが、多くの受講者はむしろより現実的なフィールドで評価を受けることに挑戦していこうとしている。

写真１　受講者全体から自分たちのプランの評価を受ける

また、七講目以降は、時間内に解決する課題や一週間じっくりと解決する課題など様々なタイムリミットや解決方法をグループで経験する。

写真２　グループワークの様子

４.企画からプレゼンテーションまで

第十一講～第十五講までは、実際に課題を設定しプレゼンテーションを行うまでの過程をグループで取り組む。

幾つもの課題をグループでこなしているので、課題解決型の話し合いには大分慣れが見えてくるが、こういった学習形態が苦手な受講者は姿を消している。5回のグループワークを通してストレスを感じている受講者には、受講を見合わせるようにアドバイスすることもある。

並行して、最初の三十分ほどの時間にプレゼンテーション作成技術を講義しながら、作業を続ける。企画に関しては、企画立案の方法に関する講義の時間を取ることができないので、ワークシートを作成し、それにそって企画の立案を行わせている。

企画の内容は以下のようなものがある。

2009年度

「この冬から春にかけて学生向けの旅行プランを10万円の価格帯で提案してください。」

2010年度

「福井県を活性化するためのNPO団体を設立し提案してください」

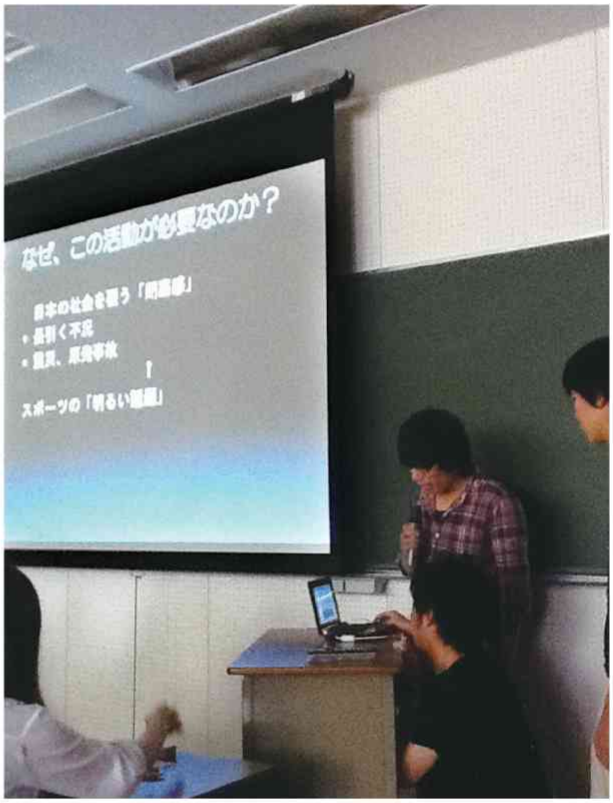

写真３　企画プレゼンの実際

５.おわりに

アクティブラーニングについては、ただ受講者に任せっぱなしではダメで、講義による知識の獲得や方向性の理解と並行しながら講義を進めていく必要があると実感している。また、場所や機材などもグループワークに向いていない講義室が多い。こうしたハードの面も考えていく必要がある。